

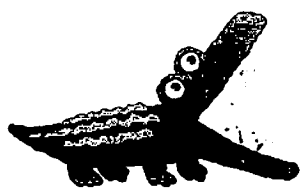
玉川教会たより

NO. 475

11月15日

▼エジプトの地に住み着いたユダヤ人は、次第に人数を増やし、富と力を蓄えていき、ついに、エジプト王に脅威を感じさせる程に、勢力を伸ばします。そこで、エジプト王は、助産婦たちに命じて、ユダヤ人が赤ちゃんを産んだ場合、女の子なら助けるけれども、男の子なら、殺してしまうようにという、何とも残酷な命令を下します。

▼しかし、この助産婦たちは、神さまを恐れる人でありました。王の命令に従わず、それを始められると、「ユダヤ人の女はエジプト人の女性とは違います。彼女たちは丈夫で、助産婦が行く前に産んでしまうのです。」



こんな言い訳を言って、ユダヤ人の赤ちゃんを助けておけ。」

神の遠大な計画

出エジプト記2:1-10

ていました。

▼助産婦たちでは打ちあがらず、エジプト王は、全国民に命じました。

「生まれた男の子は、一人残らずナイル川にほうり込め。女の子は皆、生かしておけ。」

恐ろしいことになってしまいました。

▼丁度、そのような時に、モーセが誕生しました。エジプト王の命令に従うならば、モーセを殺すしかなかった。ナイル川にほうり込め」とは、そういう意味です。

母親は、「その子がかわいかったのを見て、三か月の間隠しておいた。可愛いのには当然です。自分の子でもです。しか

し、ここでは、自分の子でもだから可愛いという意味ではなく、器量が良いという意味でしょう。だから「ぞ、後で、王女も、この赤ちゃんを助けたいと考えたのでしよう。」

▼3節。「しかし、もはや隠しきれなくなったので、バビロンの甕を用意し、アスファルトとピッチで防水し、その中に男の子を入れ、ナイル河畔の葦の茂みの間に隠した」

子どもを捨てなければならぬ母親の思いはどんなでありましょう。しかし、その思いがここに描かれることはありません。

母親は、何故このようにしたのでしょうか。この後どのようになるか、予測を立てて、計略として、このようにしたとはどうして考えられませんか。むしろ、このまま隠していれば、家族全員に咎めが及び、姉の命だって危ないかも知れない、諦めてしまった。そのように考えるのが、普通だと思えます。

しかし、諦め切れるものでもありません。それが、「バビロンの甕を用意し、アスファルトとピッチで防水」というふうなことをしたのではなからうでしょうか。

もしかすると、毎日様子を見に来て、赤ちゃんにお乳をあげようとしたのかも知れません。

▼4節。「その子の姉が遠くへ立って、どうなるかと様子を見てくる」と

姉も矢張り諦め切れなかったのでしょうか。川に投げ込み、ひと思いに殺すことなどできる筈がありません。しかし、助けることは出来ません。どうにもならぬ中で、ただ「様子を見て」としました。

何も解決策がない、手を「まねいて」見ているしかない、本当に辛いことです。しかし、何の訳にも立たないようだけれども、「手を「まねいて」見る」といいますが、愛情なのです。私たちの祈りも、その程度のことではないかも知れませんが、何の役にも立たないかも知れません。しかし、祈らずにはいられない、それが祈りでしょう。

とここで母親はどうしていったのでしょうか。母親は、「ここには来られないのです。あまりに辛くて、来られないのです。」

二が出てきて赤ちゃんを食べてしまうかも知れませんが、水が漏って、沈んでしまいかも知れません。それを監視することは出来ないのである。

現実を直視しなければ、正しい対応はできません。しかし、現実を直視できないのも、また、愛情でしよう。

▼5節。「そこへ、フアラオの王女が水浴びをしようと川に下りて来た。その間侍女たちは川岸を歩き来していた。王女は、葦の茂みの間に籠を見つけたので、仕え女をやって取って来させた」

フアラオの王女様が、水浴びをしに来ました。そして、パピルスの籠を見つけました。先ほども言いましたが、これが母親の計略だったとは、一寸考えられませんか。しかし、それでは単なる偶然なのかと言いますと、決してそうではありません。母親の計略ではなくとも、神さまの計画なのです。

▼6節。「開けてみると赤ん坊がおり、しかも男の子で、泣いていた。王女はふびんに思ひ、「これは、きつと、フライ人の子です」と言った」



赤ん坊は「泣いていました。赤ちゃん最大の武器です。赤ちゃんに泣かれたら、もう、どうしようもありません。

「王女はふびんに思ひ、「これは、きつと、フライ人の子です」と言った。」と、王女も、助けてはいけないと分かっていたので。しかし、「ふびんに思ひ」ということは、もう、赤ちゃんの魅力に負けているのです。「その子がかわいかったのを見て、三か月の間隠しておいた」と記されています。特別に器量の良い赤ちゃんだったので。

神さまによって、「可愛い」という武器を与えられたのです。

▼7節。「そのとき、その子の姉がフアラオの王女に申し出た。「この子に乳を飲ませるフライ人の乳母を呼んで参りましょうか」

何という機転でしょう。頭が良い、これも神さまによって、与えられた武器なのです。これも、事前の戦略で出来ることではありません。とっさに思いついたのです。しかし、ここにも、神さまの御旨があったのです。だから、ほんの子もが、これだけの大胆な考えを思いつくことが出来たのです。

9節。「王女が、「この子を連れて行って、わたしに代わって乳を飲ませておやり。手当てはわたしが出しますから」と言ったので、母親はその子を引き取って乳を飲ませ」

何とも、不思議な結果となりました。母親は、赤ん坊の命が守られただけでも、望外の喜びでしょう。それだけではなく、自分の手で育てることが可能になりました。更に、手当てで育てることになったのです。

▼8節。「そして、何よりも、これが神さまの計画だったからです。」

私たちも同様です。私たちは、「籠を用意し、アスファルトとピッチで防水」するようになんかを、つまり、間に合わないようなことをし続けています。「遠く」に立って、どうなるかかと様子を見て

いるのに過ぎないかも知れません。建物のこともそうですし、伝道のこともそうです。あまりにはばかしい効果はないかも知れません。しかし、これをし続けることにだけ、可能性があります。それをしなくなったり、もう、おしまいです。

▼10節。「その子が大きくなると、王女のもとへ連れて行った。その子はこうして、王女の子となった。王女は彼をモーセと名付けて言った。「水の中からわたしが引き上げた(マシーヤ)のですから。」王女は、自分がモーセを「水の中から」引き上げた」と思っています。そうかも知れません。しかし、本当にそのようになされたのは、神さまなのです。

▼「水の中から」引き上げた「この表現から、洗礼を連想するのは、キリスト者であれば、当然です。洗礼を受けた私たち一人ひとりも、「水の中から」引き上げ(られ)た」存在です。